

## 今の時代における大学の役目

03L306 入江 祐加

### 1) はじめに

「学校は何のために行くのだろう。」これは考えてはいけない問いだった。学校は何があっても絶対行かなければならない場所だった。学校に行かないということはマークシートで「①～④のどれかを選べ」と書いてあるのに、解答用紙の枠の外に自分で⑤という番号を作って、それを塗りつぶすみたいなものと考えていた。しかし特に中学校、高校で、私にはその問いは避けては通れなかった。暑い朝、汗びっしょりで40分自転車をこいで学校に行っては、朝礼で先生の長い話を聞き、つまらない授業を受け、友達関係では駆け引きの連続。「何のために学校に行っているのだろう」という問いは「何のために生きているのだろう」という問いにもなり、この単調な生活そのものに何の意味も見出せなかった。

「何のために学校に行っているのか分からない」と周りの大人に言うと、「将来、生きていくための糧になるのだから、行きなさい」と言われた。世間を知らない当時の私でも「確かにそうだ」とは思った。しかしどこかでうまくかわされたような気がした。その重い言葉のせいで、この生活からは一生逃れられないような気がして、また失望した。そんな中、私は大学に入学すれば「いま」が変わると漠然と思っていた。しかも大学に入ればその事実だけで、その後も安定した社会生活が用意されていると信じていた。つまり大学は「いま」をエンジョイしつつ、「将来」の心配もしなくていい理想の場所だと信じて、それを高校生活の不満を我慢する原動力としていたところがあった。

しかし明らかにそれは違っていた。少なくとも私の周りには、入学直後からほとんどの友

人が将来に対する明確なビジョンを持っていることに驚いた。また学校側も学生に様々なことを身につけさせるが、それは何らかの形で誰かに、つまり社会に還元しなければならないという前提であることを私は感じるが多かった。今から思えば当然のことながら、多くの授業が、将来私たちが社会に出ることを前提にして進められ、私のように「将来のことは考えず、ただ大学に行っていればいい」と考えていた人間には、どの授業をとるか、コース選択、免許・資格を取るか否かなど、あらゆる所で困ることが多かった。私とその都度思ったのは、『『将来』のために『いま』はある』ということと、「社会で役に立たないものはやる意味がない」ということである。大学に入ったからにはそのように具体的で現実的に考えていかなければならないと腹をくくった。しかし本当にそうなのだろうか。

## 2) 『『将来』のために『いま』はある』について

よく「大学時代はモラトリアムだ」と言われることが多い。(注) 「モラトリアム」を、青年の心理的社会的状況を説明する概念としてはじめて用いたのは、アメリカの心理学者、エリック・エリクソンである。ただ日本に紹介された際、その病理的側面が強調された傾向があり、エリクソンが必ずしも意図しなかった「モラトリアム青年」を否定的にとらえる考え方がめだつ(I) (渡部、2005)。大学がモラトリアムであるべきか否かは人それぞれであると思う。大学を人生の「通過点」として位置づけている友人をすごいと思うこともあったが、私は大学から先の道は意識的に考えるのを避けていた。しかし私は大学が優れた研究を推進し、人材を育成する最大の機関である以上、そこで得る知識や経験は「手段」ではなく「目的」と考えても良いと思う。つまり「将来生きるための手段」としてではなく、純粋に学ぶこと自体が、そこにいる学生、地域、ひいては社会にとっても「喜び」に

ならないだろうか。喜びとして形式を問わず学ぶことによって、大学はそれに関わる人の生活にもっと深く入り込む。モラトリアムの大学生であってもなくても、学んでいる以上、大学は「いま」やっていることを肯定してくれる。大学は「いま学んでいる」というだけの共通項でくくられたさまざまな人が自由に寄り集まり、そこに「将来」という言葉があるろうとなかろうと、たいした問題ではない。

### 3) 「社会で役に立たないものはやる意味がない」について

先ほどの渡部は、モラトリアムを享受できる青年が多くなったことを社会の進歩ととらえ、彼らの姿を肯定的に見ていくことも可能ではないか (I)と述べている。河合 (1992) は「毛虫が蝶になる中間に『さなぎ』になる必要があるように、人間にもある程度『こもる』時期が必要だ」(II)と述べている。私はそのような考え方が言われるようになったのには時代の大きな変化があると思う。ニーチェに「千の目標が今までに存在した。千の民族があったからである。ただその千の頸を一体とするくびきが、今もなお欠けているのだ。人類はまだ目標をもっていない。だが、答えてくれ、わたしの兄弟たちよ。人類にまだ目標が欠けているなら—まだ人類そのものが欠けているのではないか。」という言葉がある。(III)人間は意味を求める動物であるが、現在の日本では戦争に負け、平和に慣れ、高度成長時代、学生紛争の時のような「大義名分」はなくなった。それまでの人間が信じてきた価値、目標、意味を意識して人生を生きることはできなくなったのではないだろうか。つまり社会で役立つことを前提にして様々な教育がされているが、社会生活はもとより、私たちにただ普通に生きる上で参考になる指針すらない。その意味で何のために何を教育・研究・貢献しているのかが、本当の意味でわからなくなってきたというのが今の時代

だと思う。しかし社会生活を根拠付け、意味づける価値はなくなってしまったが、学ぶ場所である大学がなくなったわけではない。善いとか悪いとか、意味があるとかないとか、そのような評価を抜きに現実をみたとき、そこにあるのは自分なりの生きる意味を探そうとする意志である。我々は生きる意味を見つけるために大人になろうとし、その過程でモラトリウム青年が肯定される可能性もある。社会で役に立つか立たないかの議論の前に、私たちは一生懸命普通に生きることをせねばならない。大学は皆でその「真実」を追求し、たとえ答えが得られなくても、モラトリウムで養ったその思索自体が大きな意味であり、またその時初めて大学時代が出発点にもなりうる。

#### 4) これからの大学のありよう

東(2001)はコジェーヴ、ジジェクが定義したポストモダンの人間について考察する中で「20世紀とはひとこと言えば、超越的な大きな物語はすでに失われ、またそのことはだれもが知っているが、しかし、だからこそ、そのフェイクを捏造し、大きな物語の見かけを、つまりは、生きることに意味があるという見かけを信じなければならなかった時代である。」(IV)と述べている。その上で「無意味だが、無意味であるがゆえに生きる、という逆説は、いまはもう重みを失ってしまった」(IV)とも述べている。「大学の意味とは何か」と問われて、「将来」、「社会生活」などという言葉がすべてに通じる明確な答えになることはないと思う。むしろ大きな目標を失った社会に対して、明確な回答をせず、様々な角度からその社会に対して問いを発信して、社会とともに考えていくだけの寛容さが大学に求められている。また大学は吸収する場所であるとも思う。先ほどのモラトリウム青年は大学という機関がないと成立は難しい。そのようなあらゆる価値観をまずは信じ

てみて、知に集結させようとするのが学問、研究の第一歩ではないだろうか。そして結果的にではあるが、様々な人たちがいて、それぞれの個性を発揮して生活しているその事実こそが、我々が生きる理想的な社会そのものにつながるのである。

## 5) おわりに

大学の「役目」というより「意味」について考えてきたが、本来意味を求められるものと求められないものがあると私は考える。私にとって大学はマークシートで「①～④のどれかを選べ」と書いてあるのではなく、白紙の用紙に問題も何もなく「自由に記述せよ」とあるようなものだった。しかしそれは大学だけではなく、我々の社会そのもののあるべき姿が実は白紙だったということである。その時に未来を見据えた建設的な「意味」をみつけるのは難しかったが、その代わりに私の大学生活は、「自分の人生の大切な時期に学ぶことの喜びを享受した」という「役目」を果たして終わろうとしている。それが将来社会に還元できればいいことはないが、そうでなくとも私にとって大学に入ったということは少なくとも、学ぶことを通して人生を明るく見、自分たちが生きていることについて生涯考え続ける覚悟をすることだったと言えるようにしたい。

(注)「モラトリアム」

本来の意味は「戦争・恐慌・天災などの非常時に、社会的混乱を避けるため法令により金銭債務の支払いを一定期間猶予すること。支払い猶予」である。エリクソンが提唱した「青年期モラトリアム」によって「アイデンティティ（自我同一性）の確立を先送りにする心理的猶予」という意味で使われるようになった（スーパー大辞林、百科事典マイペディアより）

<引用文献・参考文献>

(Ⅰ)渡部真 『現代のエスプリ モラトリアム青年肯定論』 至文堂、2005

(Ⅱ)河合隼雄 『子どもと学校』 岩波新書、1992

(Ⅲ)竹田青嗣 『ニーチェ』 現代書館、1993

(Ⅳ)東浩紀 『動物化するポストモダン』 講談社現代新書、2001